



TITLE:

<批評・紹介>満和對譯滿洲實録 今  
西春秋著

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

---

CITATION:

三田村, 泰助. <批評・紹介>満和對譯滿洲實録 今西春秋著. 東洋史研究  
1936, 2(2): 163-164

ISSUE DATE:

1936-12-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145579>

RIGHT:

廢されたが東冶は海上交通の要地であつた爲に侯官が置かれ後漢末に及んだものと見える。此の地方の地理沿革が不明瞭になり區々の説が行はれるに至つたのは、かゝる治縣の曖昧な存在に基くのであると思ふ。かくて私は略々從來の説を信じ乍ら、冶と東冶との關係に就いては右の如く考へたい。聊か卑見を述べて批評に代へる次第である。

(日比野丈夫)

# 滿和滿洲實錄 東洋史研究會叢刊第一

今西春秋譯稿

東洋史研究會は隔月に「東洋史研究」を世に問ふのほか、學術資料の刊行を計畫し、その叢書を「東洋史研究會叢刊」と名づけた。今度その第一冊として同人今西春秋學士の譯にかゝる滿和對譯滿洲實錄を推した。

同書は舊奉天崇謨閣所藏の滿洲實錄をテキストに用ひその滿文の箇所を翻譯したものである。滿文はメレンドルフの式によつてローマナイズし、之に譯文を附した美濃版洋紙で凡そ四百頁の大冊であり、解説並に人名地名索引を附した良心的な書である。今日滿洲文を解讀する事に於いてすら可成りの苦勞を要する時、譯者は難解な

る實錄を全譯し、且之が謄寫に従事する事一年餘、文字通り獨力にて成つた書である。吾々は此の書を手にして改めて譯者の刻苦精勵の程を思ひ、衷心からの敬意を捧げるに吝ではない。

譯者は「滿洲實錄は稀覯の書であり、常人の披見の不可能なる事を思ひ、索引代りに此の書の譯刊を思ひたつた」と謙讓なる言葉を述べて居るが、實は譯者の目頃志す史料の嚴密なる批判から出發したその成果の實踐を見るべきであらう。

近時清太祖實錄に就いて見ても數種類の刊行を見た。滿洲實錄もその一であるが同書の特徴は滿漢蒙の三體で記された所謂繪入本である點に存する。

今西學士はその勞作「清三朝實錄の纂修」(史林十九卷三、四號)に於いて之等一聯の實錄を嚴密に批判系統づけて所謂滿洲實錄の滿文を以つて、尤も原初的な形式とした。そして「太祖實錄に依據せんとする時には先づ滿洲實錄に據りその他の漢文實錄、或は改修實錄の如きは之を一の解釋として參考すればよいと云ふ事になる」との結論を下した。我々はこの見解に従はなければならぬ。

更に滿文滿洲實錄の重要性は同學士の指摘の如く之を

通じて滿文老檔を解讀し得る點に存する。滿文老檔は内藤先生により清初史研究の第一の史料と折紙づけられたものであるが、先生の手により我が邦に將來されて以來三十年、未だにその史料の性質の鮮明は不問にされたまま殘されてある。然し乍らその難解の故に放置する事は許されない。滿洲實錄の滿文は滿文老檔を基礎にして纂修された事は周知の事實であり、又この事から同實錄より老檔に入り得ると云ふ可能性が存する所以である。

歴史に於いては先づ正確な知識に基いて物語る事が何よりも要求されるが、例へば史料批判と云ふ如き「地下の作業」は何と酬はれる事の少い仕事であらうか。而してこの作業を怠つた所の如何にも不安な危かしい建築物が何と多く輩出して居る事か。かゝる折同書の刊行の重要性は強調されなければならぬ。

今西學士の滿洲實錄の翻譯は色々の點より見て清初史學界を一步前進せしめたものと言ひ得よう。

本書は譯稿であり、同學士はその學的良好心から早くもその定譯の完成に精進されて居る。その成る日の一日も速かなるを祈る。尙本誌彙報を参照せられたし。

(三田村泰助)

## 大金弔伐錄

大金弔伐錄には從來、

(1) 墨海金壺所收本 上下二卷

(2) 守山閣叢書所收本 四卷

の二種の刊本があつたが、昨今この書の印行相繼いで行はれ、昨年には、

(3) 四部叢刊三編史部所收『弔伐錄』上下二卷

が刊行せられ、更に今年に入つては、

(4) 中國内亂外禍歴史叢書第三冊所收『大金弔伐錄』四

### 卷

(5) 國學文庫第三十六編『大金弔伐錄』四卷

の發刊を見、こゝのところ弔伐錄の當り年の觀を呈してゐる。しかし近刊(3)(4)(5)三種の内、(4)(5)は共に(2)守山閣本の重印に過ぎないから、從來行はれてゐた(1)金壺本(2)守山閣本に近刊(3)四部叢刊本を加へて弔伐錄は三種の刊本を有つことゝなつたわけである。(1)は張海鵬が超然堂吳氏(常熟の吳長か)所藏抄本に據つて墨海金壺に入れたもので上下二卷本、(2)は錢熙祚が四庫全書原本(文瀾閣本)をもとゝし、之を(1)の吳氏本と校合して守山閣叢書